学校教員志望学生の公的スピーチに関する教育的実践（1）

―講座開設の動機と講座の概要―

川原　誠司

宇都宮大学教育学部教育実践紀要　第5号　別刷

2018年8月3日

学校教員志望学生の公的スピーチに関する教育的実践（1）†
―講座開設の動機と講座の概要―

川原　誠司*
宇都宮大学教育学部*

本稿は，学校教員志望の学生に対して公的スピーチの講座を開設・実践した報告である。公的スピーチは学校教員になるにあたって重要なスキルと思われるが，それを綿密に学ぶ機会は教員養成課程の中ではなかなか無い。今回開設した講座の開設動機と講座の概要について報告する。

キーワード：学校教員志望学生，公的スピーチ，スピーチ不安，心理的側面，具体的指摘

1．学校教員志望学生への公的スピーチのトレーニングの意味

1.1　教員養成課程での公的スピーチの練習不足

本稿は，教員養成課程の学生を対象に行った公的スピーチ講座のまとめである。教員養成課程においては様々な科目が設定されているが，「公的な場での話し方」について丁寧に触れる授業は少ないと感じている。もちろん，個々の授業の中での発表や様々な実習の中で話す機会はある。しかし，そのような話の場面の中で「論理的なまとめ方」「表現力ある話し方」が十分に検討されることは少ない。何かは話すがそれで終わり，という感じである。

筆者はこのような状況だけでは十分ではないと前々から感じ，教員養成課程の中で独自に科目設定した（川原，2002）。またその後，新課程（宇都宮大学教育学部総合人間形成課程）においては，課程の必修科目として設定した（川原，2015）。これらについては，学生にも相応に意義を感じてもらえる結果が出ているが（川原，2015；川原，2016），依然として教員養成課程の中においてはなかなか根付きにくい内容であると感じている。

しかし，この話し方については，様々なところで教員の課題として想定されていることがうかがえる。NHK放送研修センターでは，「先生のためのセミナー」というものを開講している（https://www.nhk-cti.jp/seminars/index/N3_TEACHER）。また，教員を対象にした話し方の本も数多く出版されている（村松，2005など）。奈良県教育委員会では，新任教員に対する社会人・教員としての対応マニュアルの中に，公的コミュニケーションに関することが含まれている。（http://www.pref.nara.jp/secure/81995/hajime2-1.pdf）。

1.2　教員養成課程で特に支援するべき対象

当然，人において話し方が完璧になることはなく，その点ではいつまでも精進の必要はある。ただ，その中で，教員養成課程において特に注目しなければならない支援の対象者がいるように感じる。

それは，教員採用試験において不合格になる学生の一定割合に垣間見られる面接の苦手意識である。もちろん，不合格において筆記試験勉強不足によるものも多いことは予想されるが，そのような中でも筆記試験については申し分なさそうなのに，おそらく面接等の対人コミュニケーションの場でうまくやりとりできない問題が透けて見える学生がいる。

表1にこの点を論理的に整理したが，前記のような問題は，「大学の成績が良好なのに教員採用試験の結果が振るわなかった」という「歯がゆい残念な結果」になる群がいるということである。大学側が

---

† Seishi KAWAHARA*: Educational practice on public speech of the students who want to be schoolteachers(1): Motive of the course establishment and outline of the course
Keywords : students who want to be schoolteachers, public speech, speech anxiety, psychological aspects, concrete advice

* School of Education, Utsunomiya University
（連絡先：kawahara@cc.utsunomiya-u.ac.jp）

表1 大学での成績と教員採用試験との組み合わせで想定される結果

		大学での成績	
		問題あり	比較的良好
教員採用試験	合格	逆転力のあった幸運な結果	理想の肯定的結果
	不合格	起こりうる否定的結果	歯がゆい残念な結果

このことを看過してはならないと感じる。大学の中で，ともすると教員側の一方的な指示を「黙って素直に聞く」というスタイルを身につけていたりすると，大学での学業成績は良好だが，採用試験の面接などで要求される対人的コミュニケーション（この場合，相手は友達のような気楽な話し方をすればよいわけではない）において十分な教育や体験が少ないままという危険性がある。

このような学生の様子を大学教員が否定的に表現し，当人の責のみにするような発言を聞くことがあるのだが，本当にそれでよいのだろうか。大学教員側が自分の意向に沿うような，コミュニケーションとしてただ従順であるような一方向形式にしてしまい，教員との相応のやりとりを出せない状況が保たれ続け，それゆえに教員採用試験のような場面で相手とのやりとりで途方に暮れているとしたら，教育可能な余地は残されているのではないか。

1.3 心理的な部分を見つめる意義

前述のような途方に暮れる学生の中には，「緊張」や「不安」など公的に話す際に過度のプレッシャーを感じている者も多いと思われる。実際，大学生のスピーチ不安の研究は多い（伊藤・山本, 2014など）。このような場合に，「話すのが苦手」と自分で過度にレッテル貼りをしてしまって，苦手意識を植え付けてしまうことがある。それにより，意識的に練習することをより回避してしまうことも多い。

教員養成課程の場合，教員採用試験直前になってから試験対策としての面接練習をすることはよくある。しかし，それだけに留まることなく「話者としての自分自身のありよう」をしっかりと見つめて，それを基に練習し続けることは少ないと感じる。対策としての練習だけでなく，自らが学校教員になったときの自分自身のあり方を自覚して相手に関わっていくためにも，自らの話し方を意識し，自らのあり方に工夫をしていく意識が必要だと言える。

竹内（1999）の中に，子どもの聞く姿勢を問題視している当の教師自らが子どもに聴き取りにくい声を発していることに気づかない事例が挙げられているが（pp.65-66），教師が自らの話の仕方について留意せず，あまり練習する機会がないままということも結構あるのではないか。その結果，「言ったから分かるでしょ」という姿勢になってしまうおそれもある。

1.4 具体的に指摘することの重要性

公的スピーチの練習の際に大事なことは，具体的に指摘することである。単に「がんばったね」「それでいいよ」「大丈夫」といった曖昧な褒め言葉で，安易な練習を繰り返さないということでもある。音楽やスポーツ等でも同じだと思うが，質の悪い，ときとして的外れな練習（努力）をやみくもに繰り返しても，あまり効果がないということである。

具体的に指摘するということは，その人の苦手である部分を指摘する要素を含む。しかし，これはできないことを嘲笑ったり，怒ったりすることではない。「そこが課題になる」ということを意識・理解できるようにしてもらい，少しずつでもそこに焦点を当てた練習をしていく気持ちになることである。

したがって，当の本人に具体的な形で見える必要がある。例えば，声があまり出ていない人に「声を大きく（出せ）」という叱責をすることがあるが，どのくらい声が出ているのかということが客観的（視覚的）に把握できないと，変え方が実感できないということである。

以上，1.1 ～ 1.4に示した問題意識を基にして講座を計画した。

2. 今回の講座の概要

2.1 開講時期と対象者

2018年2月15日（木），同19日（月），同22日（木），同26日（月）の4日間，各日3時間の講座を開講した。この時期に行った理由は，次年度の教員採用試験も見据えながら，しかし小手先の試験対策だけにならないように，一度自分自身の様子を見つめ，教員採用試験までの数ヶ月間で地道に改善を図るきっかけ

を与えたいと考えたからである。

対象者は，前記のような問題意識から宇都宮大学教育学部学校教育教員養成課程に所属する学生に限定した。本講座は授業科目ではないので，当然，任意（希望者）の受講を大原則とした。

講座開設ならびに受講者募集にあたっては，図1のような案内ポスターを作成して，学部内掲示した（A3判）。また，学部各教員に個別配付して（A4判），学生への案内を依頼した。

図1　講座案内のポスター

2.2　受講者

2名の申し込みがあり，両名とも4日の講座全てに参加した。なお，両名とも次年度の教員採用試験を受験することが見込まれており，その問題意識があることが申込時に確認できた。

2.3　内容（各回の概要）

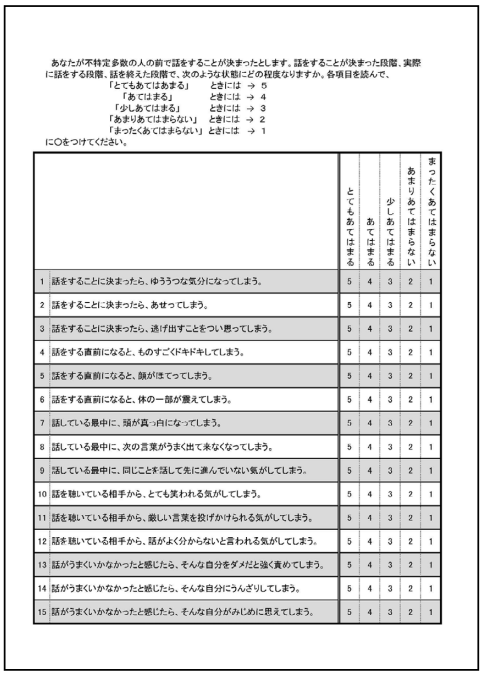
（1）第1回；自分のスピーチを見つめよう

学校教員のスピーチに関して十分ではないとされる点について，教員採用試験での学生の様子も含めて紹介し，本講座で行うこと意識することを説明した。その後，自己紹介スピーチ（その場で数分のみで組み立てる，事前準備がないもの）をおこなってもらい，その様子をビデオカメラでの動画撮影ならびにICレコーダでの音声録音を行った。これらの動画や音声についてはこの回の最後に振り返って，それぞれの特徴として感じるものを他者が率直に伝えたり，本人が感じ取ったりする時間をとった。

スピーチ実習の直後には，公的スピーチ場面について発表決定から終了までの一連の流れになる仮想状況を設定し（5場面より構成），筆者がそれらの状況を順次口頭で伝え，受講者に頭の中でイメージしてもらいながら，そのときに感じる（思い浮かんでくる）様々な気持ちや思いを目の前の用紙（各場面A3判用紙1枚）に，率直に走り書きしてもらった。さらに，その後に図2に示したような公的スピーチ時の否定的反応に関する質問紙にも回答してもらった。その際，「自分自身」と「自分から見て公的スピーチが上手だと感じる身のまわりの人」の2者を想定して，それぞれ評定してもらった。

（2）第2回；「伝わる」ことを練習しよう

発声や音声に加え，姿勢や表情といったノンバーバルの諸側面について，NHKまる得マガジン（2013）や鈴木・福島（2005）などを用いて説明した。



あなたが不特定多数の人の前で話をすることが決まったとします。話をすることが決まった段階，実際に話をする段階，話を終えた段階で，次のような状態にどの程度なりますか。各項目を読んで，
「とてもあてはまる」　ときには → 5
「あてはまる」　ときには → 4
「少しあてはまる」　ときには → 3
「あまりあてはまらない」　ときには → 2
「まったくあてはまらない」ときには → 1
に○をつけてください。

		とてもあてはまる	あてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
1	話をすることに決まったら、ゆううつな気分になってしまう。	5	4	3	2	1
2	話をすることに決まったら、あせってしまう。	5	4	3	2	1
3	話をすることに決まったら、逃げ出すことをつい思ってしまう。	5	4	3	2	1
4	話をする直前になると、ものすごくドキドキしてしまう。	5	4	3	2	1
5	話をする直前になると、顔がほてってしまう。	5	4	3	2	1
6	話をする直前になると、体の一部が震えてしまう。	5	4	3	2	1
7	話している最中に、頭が真っ白になってしまう。	5	4	3	2	1
8	話している最中に、次の言葉がうまく出て来なくなってしまう。	5	4	3	2	1
9	話している最中に、同じこと不話して先に進んでいない気がしてしまう。	5	4	3	2	1
10	話を聴いている相手から、とても笑われる気がしてしまう。	5	4	3	2	1
11	話を聴いている相手から、厳しい言葉を投げかけられる気がしてしまう。	5	4	3	2	1
12	話を聴いている相手から、話がよく分からないと言われる気がしてしまう。	5	4	3	2	1
13	話がうまくいかなかったと感じたら、そんな自分をダメだと強く責めてしまう。	5	4	3	2	1
14	話がうまくいかなかったと感じたら、そんな自分にうんざりしてしまう。	5	4	3	2	1
15	話がうまくいかなかったと感じたら、そんな自分がみじめに思えてしまう。	5	4	3	2	1

図2　公的スピーチ時の否定的反応の質問用紙

その後，前回の動画や音声をもとに上記の諸側面について検討した。第1回の動画撮影の際，声の大きさについてデジタル騒音計（CEM DT-805L）によって測定された数値を同時に撮影しており，その

数値を指標として声の大きさを検討した。その後，ノンバーバルについて，各要素いずれかのみを強調して伝えてみる練習課題も行った。

後半は，前回の宿題として文字おこししたスピーチの文章を見て，論理的な構成について説明・指摘した。この段階で，スピーチを分析する際に「表情や姿勢などの動画情報」「話し方や声のトーンなどの音声情報」「話の内容の論理性としての文字情報」の3つの面が利用可能であることを説明した。

(3) 第3回；「反応する」ことを意識しよう

前2回の復習として，新たな自己紹介のスピーチ（前回と内容を異にするよう指示した）を行い，第1回と同様に動画や音声を記録し，それを視聴することで改善された（されにくい）部分を検討した。

その後，「反応する」ということで「やりとり」の重要性を説明し，それに関わる「3つの“きく”（聞く，聴く，訊く）」という側面の重要性を説明した。その後，それぞれの“きく”状況の仮想場面での実習を行った。その際に，実際の教員採用試験も意識してもらい，またそのような試験に関連した動画サイトの情報も視聴した。

(4) 第4回；「自分らしさ」を工夫しよう

前回の復習として，学校教育的内容のスピーチの題を各自に出し，1分半でスピーチをしてもらった後，筆者が面接者の役で3分間質疑応答するという実習を行った。この様子を動画と音声で確認した。

その後，東京大学医学部心療内科（1995）や横山（1998）の資料を用いて，エゴグラムの5つの意識領域を説明して，スピーチや話し方の中にこれらの様子が見られることを説明した。その際に意識の組み合わせや順序性（川原，1999）といったものについても説明した。その上で，一般的な意識バランスを説明しつつも，自分自身の自分らしさとしてどのような点を大事にするか（どのような点を変えていきたいか）ということについて，これまでの講座での様子を踏まえて各自のありようを検討した。

3. 本稿掲載にあたっての受講者への倫理的配慮

次稿（川原，2018）で受講者の具体的な様子や気づきなどについて紹介し，本講座の意義について検討していく。本稿での情報を含め，これらの情報掲載については，事前にこれらの文章を受講者に呈示し，問題がないか確認してもらい，要望がある場合には修正を施し，最終的にメールにて同意を得た。

引用文献

伊藤 香織・山本 直利子（2014）．大学生版スピーチ場面不安尺度の作成とスピーチ場面における見積もりモデルに関する研究　久留米大学心理学研究，*13*，11-18.

川原 誠司（1999）．教員養成課程の大学生における「理想の教師像」と「現実の自分」との差異－エゴグラムを用いての研究－　宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要，*22*, 11-23.

川原 誠司（2002）．臨床心理研究分野による「教育臨床学演習」の試み －教師の仕事を望む学生に意識してもらいたいこと－　宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要 *25*, 65-74.

川原 誠司（2015）．「コミュニケーション演習」「メンタルヘルス実習」という教育的実践（2014年度）宇都宮大学教育学部教育実践紀要，*1*，187-191.

川原 誠司（2016）．「コミュニケーション演習」「メンタルヘルス実習」の教育実践（2015年度）宇都宮大学教育学部教育実践紀要，*2*，179-182.

川原 誠司（2018）．学校教員志望学生の公的スピーチに関する教育的実践（2）―講座を受講した学生の検討や内省を基にした考察―　宇都宮大学教育学部教育実践紀要，*5*.

村松 賢一（2005）．できる教師の「話し方･聞き方」明治図書出版

NHKまる得マガジン（2013）．体から変えていく人前で上がらないスピーチ術　NHK出版（NHK テレビテキスト 2013年4月－5月）

鈴木 松美・福島　英（2005）．いい声になるトレーニング　かんき出版

竹内 敏晴（1999）．教師のためのからだとことば考　ちくま学芸文庫

東京大学医学部心療内科（1995）．エゴグラム・パターン―TEG東大式エゴグラム第2版による性格分析　金子書房

横山 好治（1998）．5つの性格別 教師のストレス解消法　学陽書房

平成30年3月30日 受理

Educational practice on public speech of the students who want to be schoolteachers(1) : Motive of the course establishment and outline of the course

Seishi KAWAHARA